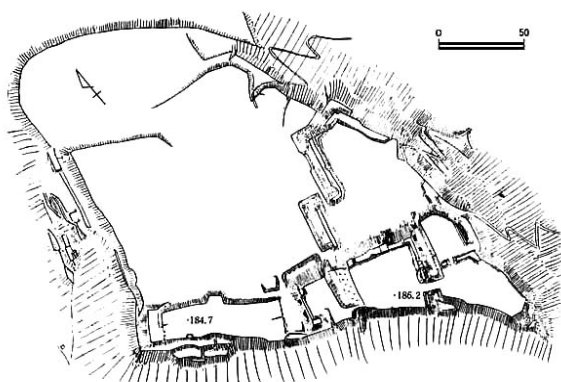


加賀地方における一向一揆の山城の特性

多樫正芳

1488年（長享二年）加賀地方において一向一揆が本格的に蜂起し、守護職にあった富樫政親を打倒した。以後約一世紀にわたって真宗の大寺や国人層が加賀を実効支配した歴史は「百姓ノ持チタル国」という別名とともによく知られてはいる。しかし遺構や遺物を活用する考古学的視点からその時代を見直そうとする動きは、それほど盛んではない。



舟岡山城（富原道晴氏作図）

本稿では、一向一揆が活動した15世紀末から16世紀後半までに改修を受けた山城と、佐久間盛政や前田家が加賀を支配した16世紀後半から17世紀初頭までに改修を受けた山城の平面プランを比較し、特に前者の特性を見いだそうと試みた。具体的な方法としては、曲輪の配置や虎口（防御を施された出入り口）、堀の形態、あるいは城全体の形状を分類・比較する従来の手法ではなく、図面（縄張り図）から曲輪や堀、総城域といった面積を算出した上で、その数値を比較する方法を試案し、分析の中心に据えた。

その結果、（１）一向一揆が最後に改修した山城は自然地形に依拠した城郭改修を行っているが、前田家や佐久間盛政ら織豊系武将の城では、曲輪を中心とした人工的空間を機軸とした改修をしている、（２）前田家など織豊系武将の山城では、ほとんどの例で曲輪の役割を明確に分化させることで、各曲輪が連携して寄せ手を迎え撃つ効率的な防御態勢をしいている。一方、一向一揆の山城では各曲輪を連携させた防御態勢をしいている山城と、地形にそって削平地を連ねているだけの山城が混在する、（３）各曲輪の役割を明確に分化した防御態勢をしいている一

向一揆の城は、大坂の石山本願寺が加賀への支配力を強化した時期以降に現れた可能性が大きい、といった特性を導き出すことができた。

そのほか、織豊系武将が改修した城郭間での比較も行った。本稿で試案した数値分析の結果では、大きな違いは見出せなかったものの、加賀において城に石垣を積極的に使用し始めたのは織豊系武将の中でも前田家であることは確認できた。

また分析項目の中でも、「曲輪面積比率」や「横堀面積比率」「堀切：縦堀：横堀」「各曲輪の面積分布」など、一向一揆と織豊系武将の城で明確な違いが現れた5項目が、城の改修者を判定するための基準になりうると提言した。本稿末では、この5基準を活用し、伝承や文献では沿革がはっきりしない山城や、改修時期について研究者ごとに見解の分かれる加賀地方の山城（日谷、中ノ峠、蓮台寺、筋生、柚木、市瀬、釣部、竹橋）について、最終改修者の推定も試みた。さらに文献や伝承によって最後の改修者がほぼはっきりしている城についても、前述の5基準で見直した。その結果、伝承では佐久間盛政の城とされてきた長屋城については、むしろ一向一揆が最終改修した可能性が大きい城であることを指摘できた。

織豊系武将は一定の規格に基づいて城を改修していた可能性も大きいため、今回提言した基準が加賀以外の地域で活用できるかもしれない。ただ、それを確かめるには分析対象地域をさらに広げる必要がある。